

令和 6 年度
東北体育・スポーツ学会大会

プログラム

抄録集

令和 6 年 12 月 7 日(土)

宮城教育大学

大会長 藤本敏彦

=====
東北体育・スポーツ学会 事務局
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
東北大学高度教養教育・学生支援機構 内
=====

プログラム

1. 開会の挨拶 9:40~9:50 大会長 藤本敏彦

2. 一般発表 10:00~11:30

会場 230教室 セッション1 座長 黒川 修行 先生 (宮城教育大学)

発表番号	発表者	所属	演題	開始時間	終了時間
1	藤田 さくら	宮城教育大学	体育科教育におけるサッカー実践の学習スタイルの考察	10:00	10:10
2	石川 実央子	宮城教育大学	フェンシングの試合構造と教材化につながる観点	10:12	10:22
3	安田 柊斗	宮城教育大学	新たなバレーボール教材の検討ーテックバレーボールに着目して-	10:24	10:34
4	井上 一彦	岩手県立大学	スポーツ機会の創出を目的とした大学体育授業における取り組みーICT機器を利用して-	10:36	10:46
休憩/座長交代				10分	

会場 230教室 セッション2 座長 井上 一彦 先生 (岩手県立大学)

5	今野 慶伍	宮城教育大学	体育授業における子どもの感情に関するレビュー研究	10:56	11:06
6	石川 百杜巴	岩手大学教職大学院	体育授業中の発話とゲームパフォーマンスの関係ー中学校1年生ハンドボール授業を対象として-	11:08	11:18
7	飯村 理紗	宮城教育大学	「体育嫌い」に対する調査の概要とその結果について	11:20	11:30

会場 233教室 セッション1 座長 沼倉 学 先生 (宮城教育大学)

発表番号	発表者	所属	演題	開始時間	終了時間
1	塩入 彬允	八戸工業大学	スポーツ系公開講座を通じた地域社会への貢献	10:00	10:10
2	高間 章	聖和学園短期大学	地域に向けた大学スポーツクラブの運営と学生の参画について	10:12	10:22
3	伊藤 竣	福島大学大学院	運動部活動地域移行政策の批判的検討ー部活動本来の在り方から考える	10:24	10:34
4	蓮沼 哲哉	福島大学	農業×スポーツ (農スポ) における地域活性化を目指す実践研究	10:36	10:46
休憩/座長交代				10分	

会場 233教室 セッション2 座長 大室 康平 先生 (八戸工業大学)

5	西村 朝日	宮城教育大学	宮城県におけるモルックの普及状況と課題	10:56	11:06
6	佐藤 駿介	宮城教育大学	ボート競技の現状と課題ー山形県における過去の活動に着目してー	11:08	11:18
7	青木 郁実	宮城教育大学	ベガルタ仙台の今後のホーム観客動員員についてー ー2024年までの観客動員の推移と2024年各試合の観客動員の特徴からー	11:20	11:30
8	沼倉 学	宮城教育大学	山形県鶴岡市における遠泳のはじまりー荘内中学校水泳部の活動からー	11:32	11:42

会場 236教室 セッション1 座長 川端 良介 先生 (弘前大学)

発表番号	発表者	所属	演題	開始時間	終了時間
1	石森 永遠	宮城教育大学	バスケットボールにおける東北1部リーグとM大学のオフェンス戦術のデータ比較	10:00	10:10
2	佐藤 唯人	宮城教育大学	大学男子バレーボール競技における強打と軟打の研究ーアタックの決定位置に着目してー	10:12	10:22
3	鈴木 紀伊	宮城教育大学	英プレミアリーグにおけるスローイン分析-開始地点に着目して-	10:24	10:34
4	大室 康平	八戸工業大学	少年期の野球選手の入団および卒団時の意識 (第2報) 経年のアンケート調査結果の比較	10:36	10:46
休憩/座長交代				10分	

会場 236教室 セッション2 座長 池田 晃一 先生 (宮城教育大学)

5	佐々木 優海	宮城教育大学	体幹捻転動作に関する練習方法についてーやり投げ選手を対象として事例的研究ー	10:56	11:06
6	八巻 朱麗	宮城教育大学	三次元分析による50m走の短距離走経験者と陸上競技未経験者の疾走動作の違い	11:08	11:18
7	近藤 政伸	福島大学大学院	自転車運動がその後のリバウンドジャンプ動作に与える影響	11:20	11:30

3. 特別講演 12:45~14:15

特別講演 (共催: 全国大学体育連合 東北支部)

会場 230教室 座長 高間 章 先生 (聖和学園短期大学)

講師	所属	演題	開始時間	終了時間
神谷 拓先生	関西大学 人間健康学部・人間健康研究科	部活動の地域移行の歴史、現状、課題	12:45	14:15

4. 閉会の挨拶 14:20~ 事務局: 藤本敏彦

会場 230

一般発表

(10 : 00 – 11 : 30)

セッション1

座長 黒川 修行先生

セッション2

座長 井上 一彦先生

体育科教育におけるサッカー実践の学習スタイルの考察

○藤田 さくら（宮城教育大学）、沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード：サッカー、技術中心学習、戦術学習、局面学習

【目的】本研究では、2008年から2017年まで行われたサッカー実践を、技術指導中心学習、戦術学習、局面学習の3つの学習スタイルに着目して分類・整理、考察することで、その時期のサッカー実践の特徴を明らかにすることを目的とする。

【方法】「多くの体育の研究者や実践者に影響を与えていると考えられること、現職の教員による創造的な実践が報告されている」（佐藤・近藤、2014）雑誌「体育科教育」における小学生を対象としたサッカー実践を、実践者の記録や、戦術・局面の項目に照らし合わせ分類・整理し、考察する。

【結果】学習スタイルの主なものとして、技術指導中心学習、戦術学習、局面学習の3つに分けられる。1998年に改訂された学習指導要領体育編までは、種目固有の技術の指導を重視されており、従来までが技術中心学習といえる。また、戦術学習とは戦術に焦点をあてゲームを指導する（宗野、2018）学習であり、局面学習とは「授業における『勉強の課題』としてねらいをもたせるのではなく、実践している『運動の楽しさ』から引き出される『ゲームの課題』として、『生きたねらい』を持たせる工夫を重視」した学習（松田、2009）として、「戦術学習論」に新たな提起として提案された学習である。サッカー実践は18本あり、種目の祭事性に着目した実践を除いて、技術指導中心学習は4本あり、戦術学習は6本、局面学習は7本あった。

【考察】技術指導中心学習の実践は、すべて低学年を対象としており、ねらったところに蹴る、止めるという動きの獲得をねらいとして子どもたちが上手になったと実感し、技能向上の楽しさに触れることができるようなねらいであった。戦術学習は、戦術的課題である「攻撃できるスペースを生み出し、そのスペースを有効に利用する」をねらいとした「センタリング・サッカー」などがあり、動き方を明確に学ぶことができる学習であった。局面学習は、局面を1つずつ局面に分け、それらを学習した後局面をつなぎ合わせて学習しているものや、局面を分けずにゲーム、反省、ゲームの繰り返して運動の特性をどの子にも味わえるゲームとして学習させるものがある。また、戦術学習では、学習者の「ゲーム理解」ではなく指導者の意図した技術や戦術が発揮できるように「誇張されたゲーム」になってしまう誤解や、「技術」から「応用」への積み上げの課題を克服しきれていない点が挙げられている（宗野、2018）にもかかわらず、2017年になってもいまだ学習がされていることは戦術学習の価値が評価されていることが考えられる。また、局面学習は、2014年・2015年にかけて5本の実践が行われており、従来までの課題を解決しようと試みていると捉えることができる。

【参考文献】・宗野文俊（2018）学校体育におけるボールゲームの指導理論に関する研究—フットボールに着目して—大空社出版.p86,p90

・松田恵示(2009)「戦術学習」から「局面学習」へ—「ハーフ・バスケット」の授業実践とこれからのボール運動の授業づくり—.体育教育研究.サポート社会学.p10-11

フェンシングの試合構造と教材化につながる観点

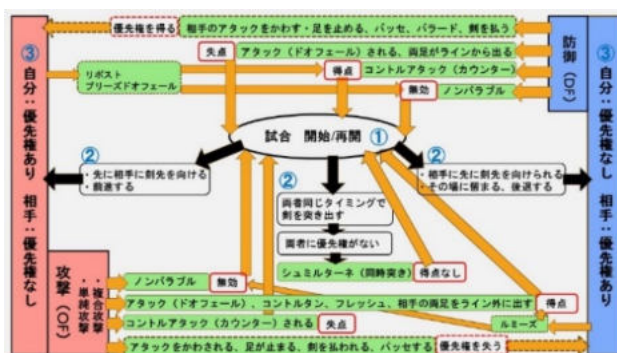
○石川 実央子 (宮城教育大学)、沼倉 学 (宮城教育大学)

キーワード：フェンシング、試合構造、優先権、教材化

【目的】筆者は大学の卒業研究において、児童・生徒が「戦術的な攻防の駆け引きの面白さ」を味わうことのできることを目指したフェンシング（種目はフルール）教材の開発に取り組んでおり、その前段階である素材研究の重要な課題の1つに競技の試合構造の解明が挙げられる。本研究では、試合構造を分析・整理することにより、フェンシング特有の激しい攻防の駆け引きを生み出す要素を明らかにするとともに、教材化につながる観点を考察・検討することを目的とする。

【方法】これまでフェンシングの試合構造を示した研究はほとんどないため、日本フェンシング協会の競技規定や山本（1976）の技術書を基に、試合構造を解明し図式化していく。

【結果】山本（1976）は、フルール種目の技術構造について、フェンシングの動作は「攻撃」と「防御」の2つに限定できることを示しており、このことを踏まえて試合構造を分析・整理した結果、右の図式のようなになった。図から、攻撃と防御のすべての動作が「得点」「失点」「無効」「優先権を得る/失う」のいずれかの結果につながっていくとともに、この図全体を捉えると、一番上と下の「優先権を得る/失う」という2つの結果が、試合の中で攻撃と防御の循環を生み出している要素であることが分かった。



【考察・まとめ】上の図を教材化で目指す「戦術的な駆け引きの面白さ」の視点から分析すると、教材につながる観点として、①攻撃、防御動作の両方に「得点」「失点」「無効」「優先権の移動」の結果があり、優先権のない防御側にも得点のチャンスが、反対に優先権を持つ攻撃側にも失点のリスクがあるということ、②優先権が連続的な攻防の切り替えを生み出していることの2点を挙げるができる。そして、①により児童・生徒にとって、得点するための戦術のバリエーションが増えることが期待され、②は駆け引きをせずに力任せに相手に突っ込むような動きを抑制するのに効果的であると考えられる。したがって、教材化では「優先権」に着目することで、児童の動きの中に意図的かつ戦術的な攻防の駆け引きを引き出すことが可能になると考えられる。しかし、この優先権は目に見えないものであることに加え、選手や剣のちょっとした動作によってその所在が瞬時にかつ連続で切り替わるため、初心者や試合を観戦する人にとって、フェンシングを難しく感じさせる大きな要因となっている。よって、教材化においては優先権のルールをそのまま適用するのではなく、優先権自体も教材化する必要があり、さらに具体物を用いて可視化することにより、サッカーやバスケットボールにおけるボール同様、「持っている方が OF（攻撃）、持っていない方が DF（防御）」という、試合における両選手の動きを明確にする機能を優先権に与えることが可能になると考えられる。

【主要参考文献】1) 日本フェンシング協会競技規定

2) 山本耕司（1976）「電気フルールによる最新フェンシング技術書」ベースボールマガジン社

新たなバレーボール教材の検討

ーテックバレーボールに着目してー

○安田 柊斗（宮城教育大学）、沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード 身長、ネット型、テックバレーボール

【目的】 バレーボール競技において低身長の者がスパイクを打つことは難しい。そこで、低身長でもスパイクを打つことができるバレーボールの教材を考えるにあたって、テックバレーボールに着目した。テックバレーボールは性別、身長、年齢に関わらず楽しめるスポーツである。ネット型種目に共通する特徴とテックバレーボールの特徴を整理することで、テックバレーボールの教材としての可能性を検討することを目的とする。

【方法】 ネット型種目の特徴については文献調査を行う。テックバレーボールの特徴を調査するにあたっては、大学生を対象にテックバレーボールのゲームとバレーボールのゲームと実施し、ラリー数、スパイク出現率、スパイクによる得点の割合、ミスによる失点の割合などの項目をバレーボールの結果と比較することでテックバレーボールの特徴をまとめる。そこから新たなバレーボール教材におけるテックバレーボールの可能性について考察する。

【結果】 ネット型は、コート上でネットを挟んで相対し、身体や用具を操作してボールを空いている場所に返球し、一定の得点に早く到達することを競い合うゲームである。岩田（2005）によると、ネット型ゲームに共通する戦術的課題は、「分離されたコートの向こうにいる相手に対し、ボールをコントロールさせないように攻撃すること、および自陣の空間を守ること」と考えられている。

次にテックバレーボールのゲーム分析結果を示す。

	平均ラリー回数	スパイク出現率	スパイクの得点	ミスによる失点
1set	1.26 回	83%	26%	63% (42%)
2set	1.40 回	84%	5%	85% (80%)
3set	1.18 回	76%	9%	73% (50%)

* ミスによる失点のうち、（ ）は全体の得点の中のスパイクミスの割合である。

【考察】 テックバレーボールはバレーボールに比べ、スパイクの機会が平等にあるだけでなく、一本目のディグの難しさが緩和されており、スパイクを打つまでの過程がプレイしやすい。しかし、狭い台上に返球しなければいけないため、高いボールコントロール能力が求められる。そのため、ラストボールやスパイクミスが起りやすい。低身長でもスパイクを打つことができるメリットはあるが、より高いボールコントロール能力が必要となるので、その技術学習をどのように教材の中に取り込んでいくかがポイントになってくる。今後は実際にテックバレーボールを教材化し、学内で実践した成果と課題をまとめ、その教材の可能性を検討する。

【主要参考文献】

- ・文部科学省 中学校学習指導要領（平成 29 年度告示）解説保健体育編
- ・岩田靖（2005）技術指導からみた体育－体育における技術・技能・戦術の意味

スポーツ機会の創出を目的とした大学体育授業における取り組み —ICT 機器を利用して—

○井上一彦（岩手県立大学），田口直樹（仙台大学），澤村省逸（岩手大学）

キーワード：体育授業，ICT 機器，運動強度，心拍センサー

【目的】第3期スポーツ基本計画には、「多様な主体におけるスポーツの機会創出」が挙げられており，学校や体育授業にもその主体としての役割が期待されている。そこで，本研究ではスポーツ機会の創出につながるような体育授業を展開することを目的として，ICT 機器（心拍センサー）を利用した授業を行い，学生の運動への意識変化を調査した。

【方法】I 大学短期大学部の1年生3クラス70名を対象として，体育授業で持久的運動を行った。まず，1回目の授業では，心拍数と運動強度などの予備知識を学習した後，使用するアプリの説明，自身の脈拍を取る練習を行った。2回目の授業では，アプリを利用して運動の記録を取りながら，10分間の Walking を2回行った。Walking 後にすぐに脈拍を測定して運動強度を確認した。3回目の授業ではPOLAR 社製心拍センサー「VARITY SENSE」を利用して10分間の Jogging を2回行った。実施する前には各自で目標運動強度と対応する心拍数を算出しておき，実施中には表示される心拍数を確認しながらペースを調整することとした（図1）。そして，3回の授業が終わった後，履修者にアンケートを実施した。

第1週（事前学習）	第2週（Walking）	第3週（Jogging）
運動強度と評価指標	アプリで記録して2回実施	Polar Verity Senseを使用
安静時心拍数	予め設定した強度（心拍数）を目指す	運動中はアプリに表示されるデータを見ながら強度を調節して予め設定した運動強度（心拍数）を目指す
最大心拍数	終了後に心拍数を測定、目標と結果を評価	終了後はアプリで保存
カルボーネン法	2回目は1回目よりも強度を高くする	2回目は1回目よりも強度を高くする
脈拍の取り方		
運動強度と目標心拍数の設定		

図1 授業の方法

【結果】授業後のアンケートで、「学びがより一層深まった」と回答したのは98.4%，「健康や体力向上に興味・関心が高まった」と回答したのは85.7%，「ICT 機器を利用して運動機会を設けたい」と回答したのは88.8%であった。

【考察・まとめ】アンケートの結果から，ICT 機器を体育授業で利用することで，参加者が運動やスポーツに興味・関心を持つようになることが示唆された。これはICT 機器によって自身の運動中のデータをモニタリングすることで，自身に適した運動強度や予め設定した運動強度に合わせる事が容易になり，無理なく効率的な運動の実施が可能になったことが理由のひとつであると考えられる。このことから，ICT 機器を利用することで体育の授業が学生のスポーツ機会の創出に貢献できる可能性があることが示唆された。

体育授業における子どもの感情に関するレビュー研究

○今野慶伍（宮城教育大学教職大学院，仙台大学）

川戸湧也（三重大学教育学部，仙台大学）

キーワード：体育嫌い，運動有能感

1. 背景および目的

勝利至上主義や技能偏重な指導，体罰などの問題によって，「体育嫌い」と呼ばれるような身体に対してネガティブな感情を抱く子どもの存在が指摘され，長年の課題となっていることも考えられる。このような課題に対して，一人でも多くの子どもが身体活動の価値を享受できるような工夫を行い，体育・スポーツの課題解決に向けて取り組んでいく必要がある。

「体育嫌い」は古くから指摘されている課題であるが，先行研究を体系的に整理した研究は少ないため，整理・分析することは意義があると考えられる。本研究の目的は「体育授業における子どもの感情」に関する先行研究を整理し，現状の課題を明らかにすることである。

2. 方法

論文の収集は「CiNii Research」を用い，「運動有能感 体育」をキーワードに「本文リンクあり」の研究を検索した。検索し得られた研究から，学術誌と大学・研究所等の紀要に掲載されている学術論文 167 件が抽出された（参照日：2024 年 11 月 8 日）。また，本研究の学術論文選定基準に適合する論文を選定したところ，76 編の論文が抽出された。さらに，本研究で対象とされた論文を，掲載された学術誌ごとに整理し，研究対象，論文の変遷ごとに整理された。

3. 結果

「運動有能感 体育」をキーワードに抽出された論文が整理された。最も多かったのは，スポーツ教育学研究で 3 編の論文が掲載されていた。次いで，体育学研究，北関東体育学研究が 2 編，臨床教科教育学会誌，人間環境学研究，日本教育情報学会が出版した年会論文集，日本教科教育学会誌，体育科教育学研究がそれぞれ 1 編であった。その他，学術雑誌が 3 編，各大学もしくは研究機関の紀要が 61 編掲載されていた。

本研究で抽出された 76 編の論文を，研究の目的や研究方法，研究対象等から整理した結果，4 つの研究対象に整理された。また，整理された 4 つの研究対象とは「小学校」「中学校」「高等学校」「学校種を跨いだ研究」である。これらの研究対象とともに，学年別，対象者の性別ごとに整理された。

論文の変遷について，学習指導要領改訂の時期を考慮した 5 つの区分において整理を試みた。「運動有能感 体育」をキーワードとして抽出された 76 編の論文が第三期から第五期まで研究対象とともに整理された。

4. まとめ

本研究によって，対象とされた論文を，研究対象，学年別，性別と整理をしたところ，小学校を対象とした論文が多く掲載されていた。また，武道およびダンスの研究が限定的であった。

体育授業中の発話とゲームパフォーマンスの関係 —中学校1年生ハンドボール授業を対象として—

○石川 百杜巴 (岩手大学教職大学院) 清水 将 (岩手大学教育学部)

キーワード：発話、ゲームパフォーマンス、ハンドボール

【目的】 ゴール型は、入り乱れの特性をもち、空間に走り込み、仲間に自分自身の位置を知らせたりするために、パスに必要な言葉を多く発する必要がある。しかし、ゲーム中に何をしゃべっているのかや位置・タイミング等を示す言葉を多く発すれば実際にゲームパフォーマンスが向上するのかも未だに明らかになっていない。ここで本研究では、中学校1年生ハンドボール授業を対象として、生徒の発話とゲームパフォーマンスの関係を明らかにすることを目的とした。

【方法】 生徒にマイクを装着して、音声を録音し、録音した音声をテキスト化した。また、得られたデータをテキストマイニングした。授業をビデオカメラを用いて撮影し、ゲームパフォーマンスを分析し、生徒の発話との関係を調べた。

【結果】 1授業当たりの発話と1ゲーム当たりの触球数には相関はみられなかった。また、触球数の多い6人と少ない6人を比較し、1授業当たりのボールを呼ぶ回数と触球数の関係に相関関係はみられなかった。

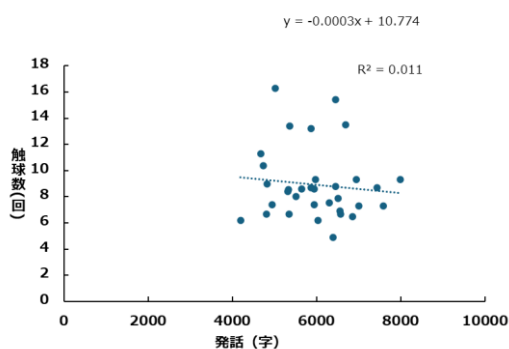


図1 発話と触球数の関係

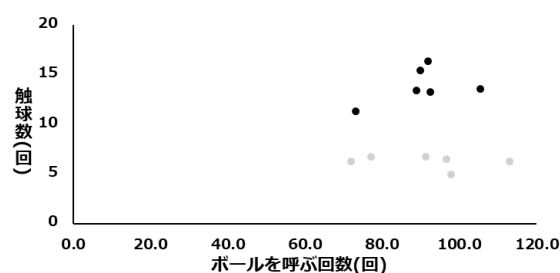


図2 ボールを呼ぶ回数と触球数の関係

表1 係り受け解析の比較

触球数の多い6人に対して触球数の少ない6人は、ゲームやルールを理解していないことから発せられる言葉が多く出現していることが明らかになった。

触球多者6人	出現回数	触球少者6人	出現回数
ゲーム—できる	15	場所—入れ替わる	11
大丈夫—できる	14	こっち側—攻める	8
ゲーム—いい	7	大丈夫—準備	7
大丈夫—強い	5	切り替え—早い	7
壁—いい	5	最初—場所	5

「体育嫌い」に対する調査の概要とその結果について

○飯村 理紗（宮城教育大学）、沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード：体育嫌い、アンケート調査、劣等感

【目的】

近年、「体育が好き」「体育が楽しい」と感じている子どもたちが増加してきていることが報告されている。しかし一方で「体育が嫌いだ」と感じている子どもも一定数存在している（文部科学省 2023）。そこで本研究では、これまで行われた体育嫌いに対する調査研究を概観し、その結果から分かる体育嫌いの要因や年代による変化などについて検討することを目的とする。

【方法】

「体育嫌い」について調査研究をまとめた論文8本を対象とし、調査の概要、体育嫌いの要因、年代による変化などを整理し考察する。

【結果】

○体育嫌いの調査方法について

調査方法について、すべての論文で質問紙等を使用したアンケート調査が実施されていた。対象について、小学生のみを対象としたものが2本、中学生のみを対象としたものが1本、大学生のみを対象としたものが3本、小学生から高校生までを対象としたものが1本、中学生と保健体育科主任を対象としたものが1本であった。

○体育嫌いの要因について

体育嫌いの要因は様々であるが、特に「劣等感を感じる」という要因が一番多く、8本中5本で挙げられていた。その他の要因として、教師の評価の仕方やできない子に対する指導など教師に関する要因、体育授業の進め方、種目の特性など体育授業そのものに関する要因、恥ずかしさや不安、本人の性格など子ども自身の要因などが見られた。年代の変化についてはあまり見られなかったが劣等感や恥ずかしさなどの要因は特に2010年以降によく挙げられたことが分かった。

【まとめ】

体育嫌いの調査方法についてはアンケート形式で実施するものが主流であった。その中でも、実際に体育の授業を受けた後に回答するもの、過去の経験から回答するもの、児童生徒学生だけでなく教師にも体育嫌いに関するアンケートを実施するものなど、回答の対象者や実施期間にそれぞれの特徴が見られた。また、体育嫌いの要因については、劣等感を感じるものが体育嫌いに大きく影響すると考えられる。ここから、他者の存在があることにより体育の授業内で他者との能力など比較をしてしまい、劣等感を感じてしまうのではないかと考えられる。

【参考文献】

- ・文部科学省(2023) 令和5年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果,調査結果の総括

会場 233

一般発表

(10 : 00—11 : 42)

セッション1

座長 沼倉 学先生

セッション2

座長 高間 章先生

スポーツ系公開講座を通じた地域社会への貢献

塩入 彬允（八戸工業大学）

キーワード：生涯スポーツ、部活動、公開講座、卓球

【目的】

生涯にわたり健康で生活するために、運動習慣を身に付けることは重要とされている。また、部活動の地域移行が進められており、児童・生徒がスポーツを楽しむ機会が減少してしまっている。自治体の計画の中では、指導者の確保が課題になっており大学生の活用が期待されている。そこで、地域住民のスポーツへの興味関心の向上や地域コミュニティの活性化に寄与することを目的としたスポーツ系公開講座を実施し、今後の課題について検討した。

【方法】

2024年7月～10月までに開催した2回のスポーツ系公開講座について、実施内容を評価し今後の課題について検討した。また、参加者と講師を務めた大学生に対して実施したアンケート調査をもとに考察を行った。

【結果・考察】

本講座は筆者と筆者が所属する大学の卓球部員を講師として、地域住民に対してスポーツへの興味関心の向上や運動習慣の定着、地域コミュニティの活性化に寄与することを目的に実施した。第1回目は小・中学生を対象とし場所は大学の体育館で開催した。参加者は20名であった。第2回目は小学生以上の初心者・初級者を対象とし、場所は大学のサテライトキャンパスで開催した。参加者は7名であった。

参加者へのアンケートでは、講座の内容において「満足」もしくは「やや満足」の回答が96.2%、講座の時間において「満足」もしくは「やや満足」の回答が61.5%、また参加したいかについて「思う」もしくは「やや思う」の回答が96.2%であった。参加者の多くは普段交流がない大学生と一緒に練習ができたことから満足度が高かったと推察される。講座の時間の満足度を低く回答した参加者の多くは「時間を増やしてほしい」という感想であった。

講師を務めた大学生に対するアンケートでは、「参加者が楽しそうに卓球をしていた」、「色々な人と練習をしながら交流することができてよかった」という回答があった一方で、「練習メニューを決めたほうがよい」、「説明や指示が伝わっていない」という意見もあったことから、今後の課題として改善していきたい。

【参考文献】

- ・ 八戸市教育委員会 八戸市における中学校部活動の地域移行に関する検討状況等について（令和5年12月）

地域に向けた大学スポーツクラブの運営と学生の参画について

○高間章、及川佳澄（聖和学園短期大学）、佐藤浩明（郡山女子大学）

キーワード：公開講座、大学スポーツクラブ、地域貢献

【目的】聖和学園短期大学（以下、本学）では地域の活性化に寄与することを目的に公開講座を開講し、スポーツ系の講座は2005年度の健康スポーツ教室から始め、現在はそれに加えてサッカー、ダンス、バレーボールの無料教室を実施している。さらに、2018年度からサッカーとダンスの有料スクールを開講し、現在はバレーボールやチアダンスを加えて月1～7回程度実施している。各教室・スクールのコーチは専任教員および非常勤講師が担当し、20年の取組の中で種目や回数を徐々に増加させて運営してきた。池田¹⁾は大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型）の運営に関する諸問題を整理し、課題を提言している。本研究は本学スポーツクラブの諸問題を学生の参画を中心に整理することを目的とした。

【方法】これまでの教室の変遷や、2018～2023年度の教室の参加人数を集計、一覧にした。また、2023年度の参加者（健康スポーツ教室）・保護者アンケート（40件）、2021～2023年度の学生アンケート調査（43件）を集計、分析した。総合型の先行事例の公開情報の収集とインタビュー調査を行った。

【結果および考察】先行研究に習い、本学スポーツクラブの状況を財源、大学組織の関わり方、教員・学生の負担、行政との協力関係について整理した。財源および大学組織の関わり方について、無料教室はコーチング実習の授業の一環として大学施設を会場に実施し、教員・学生が参加、運営している。有料スクールは授業終了後の時間帯に大学施設や市民センターで実施し、コーチ担当の教員・学生は有償で参加、運営している。会計は適正な処理を行うために学内事務組織で管理している。

教員・学生の負担について、2024年度の教室は健康スポーツ6、サッカー4、ダンス4、バレーボール3の全17回で、そのうちコーチング実習で行うものは11回（65%）である。本学では健康スポーツ、ジュニアスポーツ、ダンスの実習を開講し、教員は参加者へのコーチングを担当し、学生に種目の理解やプランニングなどを教授し、学生の関りが徐々に増えるように展開する。富山の研究²⁾によると本学の運営形態は教員が講座を企画・立案し、学生は補助的な立場で活動するサークル型に分類される。サークル型は地域貢献活動を教育に活用し、学生は教員のコーチングを目のあたりにしながら、自らも補助的な立場でコーチングを行い、授業を通じて学んだ知識と技能を実践する機会をつくる内容である。学生アンケートでは実習の経験をとても良かった（75.6%）と回答しているが、2023年度のダンスでは自己の子どもへの関わりに対して良くなかった（11.8%）と評価している状況がみられた。理由として「ダンスに自信がなかったから」、「子どもが苦手」といった苦手意識を払拭できないままにコーチングしたことを挙げた。また、ダンスの保護者アンケートでは、学生スタッフの親切、丁寧な対応が評価される一方、上手くできない子ども達へのフォローや振り付けの難易度を不満に感じる回答もあった。ダンス教室は平均60.5名、幼児から中学生まで幅広い年代が参加したため、グループを分けて、教員と学生が共同でコーチングを行ったが行き届かない部分があったことが見出された。今後は参加者の人数と年代のバランスを考慮し、適正な人数のコーチングスタッフで開催することが確認された。

行政との協力関係について、埼玉県の武蔵丘短期大学を拠点にしたNPO法人武蔵丘スポーツクラブでは吉見町の生涯スポーツ、子育て支援、国民健康保険、介護予防や東松山市の子育て支援の事業を受託し、運営費の多くを受託事業収入で得ている。今後は総合型地域スポーツクラブを設立し、学生が参画しやすい工夫をしながら、地域住民と連携した組織的運営や法人化を検討し、行政と協力関係を築いていきたい。

【参考文献】

- 1) 池田孝博, 大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブの運営に関する諸問題, 福岡県立大学人間社会学部紀要, 2010.
- 2) 富山浩三, スポーツを通じた大学の地域貢献プログラムの開発 「教員」「学生」「地域住民」のネットワークシステムの構築, 体育・スポーツ教育研究4, 2003.

運動部活動地域移行政策の批判的検討

～部活動本来の在り方から考える地域移行～

○伊藤 峻（福島大学大学院）、小川 宏（福島大学）

キーワード：部活動、地域移行、学校教育

【目的】スポーツ庁が掲げる「部活動の地域移行」はこれらの背景をもとに、学校主体でスポーツを支えるのではなく、地域でスポーツを支えることへの転換を進めている。各地域が実情に合わせて様々な取組みを行っているが、全国的に推進されていない実態は、スポーツ庁の推進する新たなスポーツ環境の整備に重点をおいた取組に起因していることが考えられる。本研究では、運動部活動の概念をもとに現在行われている運動部活動の地域移行の取組について批判的検討をし、今後推進するための根本的な考え方を提示することを目的とする。

【方法】学校教育活動内の運動部活動に関することでありながら、全国における取組の実践事例において、学校の取組がほとんど報告されていない。部活動や部活動地域移行に関する文献等进行分析・検討し、運動部活動の本来の在り方を明らかにする。

【結果と考察】令和3年度から開始された運動部活動の地域移行政策の状況として、推進計画を策定した自治体は約29%となっており、新しいスポーツ環境の整備を重点とする取組みが困難な状況にあると言える。その要因として部活動の曖昧さが挙げられる。部活動の在り方は正規の勤務時間内、教員の能力の範囲内、学校内で行う活動である。少子化であっても生徒や教師数の状況を踏まえた学校部活動を設置し、学校内で専門的な知識や競技経験がない教師であっても担当できる部活動体制を整え、学校教育活動として最大限の教育的効果が得られるように努力することが求められている。部活動を学校教育の範囲として考えた場合、部活動の課題である「専門的な指導」「勤務時間外の活動」「公式戦、対外試合を含む学外での活動」は部活動の範囲外と言える。「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」では地域移行の内容の例として、部活動指導員や外部指導者の確保があるが、学校単位の活動を活性化させるため、地域移行の阻害要因となる可能性がある。地域移行の推進のためには、部活動の本来の在り方での活動に縮小し、地域へのニーズを明確にする必要がある。

【まとめ】地域移行では、教育活動内の部活動を学校単位から地域単位にすることである。しかし全ての役割を地域に移行することは困難であると言える。そこで、地域移行に対し学校教育の範囲で役割を担うことが重要であると考えられる。限られた学校教育活動の範囲で対応できないニーズに対して、地域が補っていくと考えれば、今より地域移行が推進しやすいのではないだろうか。現在の部活動は様々なニーズに対応し、役割の範囲を拡大させ続けたことで多くの課題を抱えている。それらの課題に対し、地域が学校教育活動の範囲を包摂している関係にあり、地域と学校が解決に向けて取り組むことが必要である。

農業×スポーツ（農スポ）における地域活性化を目指す実践研究

蓮沼 哲哉(福島大学)

キーワード: 農業、スポーツ、地域活性化

【目的】近年、スポーツによる地方創生が謳われ、全国各地で「特色あるスポーツによる地方創生、まちづくり」の取り組みがされている。その取り組みは、スポーツを活用し、地域の社会課題の解決を促進することで、スポーツが地域、社会に貢献し、競技振興への住民の理解と支持を広げ、競技振興と地域振興の好循環を目指している。そこで本研究では、農業とスポーツ(農スポ)を関連させた特色あるイベントを実施し、地域資源や魅力の再発見や、スポーツを専攻する学生や農業を専攻する学生らの被災地における農業支援から地域課題を解決するとともに、地域活性化となり、「農スポ」の新たな価値を目指した実践研究である。

【方法】本研究は、農林水産省の平成 31 年度農業人材力強化総合支援事業として、農業の新しい働き方確立支援「新しい働き方地区プロジェクト」として事業を展開してきた内容や「地域活性化事業」として取り組んだ「農スポイベント」から、地域の課題解決と活性化の可能性について検証していく。また、スポーツ専攻の学生と運動部所属で農業専攻の学生が合同で被災地の農業支援を行い、地域の復興や活性化につなげることができるか検証する。

【結果と考察】「新しい働き方地区プロジェクト」では、福島市松川町において、農業とスポーツを組み合わせた3つの「農スポイベント」を実施した。**【地域の子ども対象/そば打ち体験×田んぼでダッシュ】**【スポーツ専攻の学生対象/りんご収穫×地域の農産物クッキング】**【地域の小学生、スポーツ専攻の学生対象/ボッチャ体験×地元農産物の6次化商品PR】**これらのイベントにおいて、参加者へのヒアリングから、「農業という分野から地域の魅力を発見した」「普段、関わることのない農業という分野の魅力を感じることができた」などの意見があった。また、「地域活性化事業」では、福島市の観光果樹農園が立ち並ぶ地域にて、観光農園と連携し、サイクリングと農園内でのBQQを合わせたイベントを実施した。こちらのイベントにおいても、参加者ヒアリングから「サイクリングで地域資源を堪能し、農園内でのBBQで新しい観光農園の在り方、地域の魅力の再発見ができた」などの意見があった。以上から、農スポイベントは、地域の魅力発見につながる可能性が大いにあると言える。さらに、スポーツ専攻の学生と運動部所属の農業専攻の学生が合同で被災地にある農家の農業支援を行った。被災地の農家さんからは、地域における若手の労働力不足から「元気のある学生の支援はとても助かる」「作業の要領の呑み込みが早い」「若い人がいるだけで楽しくなる」など、学生による農業支援が地域のニーズに対し有効となることが示唆された。スポーツ専攻の学生からは、「農業は大変であるが作業方法を理解すれば楽しい」などの意見があった。

【まとめ】本研究では、農業を基盤とする地域において、農業とスポーツを関連させた「農スポイベント」を実施し、イベントにおける関与観察と参加者や関係者からのヒアリングから考察を行った。その結果、農業とスポーツを関連させたイベントは、地域の魅力の発見や異分野間の新たな交流を生み、地域の活性化につながる有効な方策であると考えられる。また、「農スポ」は、イベントによる地域活性化だけではなく、そこから地域の課題解決につながる重要な役割を担うと言える。

宮城県におけるモルックの普及状況と課題

西村 朝日（宮城教育大学）、沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード：モルック、ユニバーサルスポーツ、宮城県

【目的】 小学校体育におけるモルックの教材としての可能性を検討している過程で、宮城県におけるモルックの普及状況に着目した。本研究では、宮城県におけるモルックの普及状況を整理し、今後の展望及び課題を検討することを目的とする。

【方法】 ホームページ等からモルックやその普及に関わる基礎的情報を整理し、名取市愛島地区におけるモルックの普及活動と利府町まちおこし支援協力会りふくるへの参与観察を行い、その結果を検討する。

【結果】

①名取市における普及状況

名取市の愛島公民館では、児童センターに通う小学生を対象としたモルック体験会が毎月開かれている。小学1年生から6年生までが参加し、子供たちにとって身近なスポーツとして親しまれている。また、レクリエーションを通じ、地区民の健康づくりと相互の親睦・優和をはかるとともに、時代を担う青少年の育成に寄与することを目的とした「愛島地区レクリエーション大会」の種目としても二年連続で設定され、小学生から高齢者まで、年齢・性別問わず楽しまれている。

②利府町における普及状況

利府町では、地域活性化を目指す住民グループ「利府町まちおこし支援協力会りふくる」が、モルックの普及に取り組み、町内での体験会開催や、企業とのコラボプロジェクトとして「スパイシーモルック」の開発を行っている。スパイシーモルックの一般販売には価格設定と販路確保が課題となっているため、まずはふるさと納税の返礼品として出品されている。保健福祉センターでは町民に対し無料で用具の貸出が行われている。

【まとめ】

宮城県では、利府町や名取市のように、市民や町民へ向けた普及が盛んな自治体もあるが、行政における取り扱いは進んでいるとは言い難い。宮城県モルック協会は大会と体験会を月に一度ずつ開催しているが、参加者は固定化された20代から40代の男女である。参加者の固定化やユニバーサルスポーツとして注目を集めているスポーツであることを踏まえると、学生や高齢者への普及には、課題が残されていると言える。今後は、モルックの教育的な意義や効果の明らかにし、教材としての可能性について検討することで、若年層への普及を図るとともに、学習者の学びの機会を保障した教材の提案を行っていく。

【参考文献】

- 1) 日本モルック協会. <https://molcky.jp/molkky/>, (参照 2024-11-18)
- 2) 利府町. <https://x.gd/65agj> (参照 2024-11-18)
- 3) 八ツ賀秀一. Dr.モルックフィンランドからつながる笑顔. 心書院, 2023
- 4) 利府町まつ・ひと・しごと想像ステーション tsumiki. <https://x.gd/WVJfg>, (参照 2024-11-18)

ボート競技の現状と課題 ～山形県における過去の活動に着目して～

○佐藤 駿介（宮城教育大学）

青木 郁実、鈴木 紀伊、石森 永遠、佐々木 優海、佐藤 唯人、池田 晃一
（宮城教育大学）

キーワード：ボート競技、山形県、活動状況、現状、課題、国民体育大会

【目的】 山形県で現在活動している学生のボート部は庄内地域の高校3校と村山地域の大学1校までに活動規模が縮小されてきた。本研究では、今後山形県内の「ボート競技」の消滅を防ぐためにも現在の状況と過去の取り組みを踏まえ、現在の課題を明らかにすることを目的とする。

【方法】

- 1) 文献調査：「日本ボート協会 100 年史」「10 年の歩み」「山形県ボート協会創立 30 周年記念誌」から当時の状況や現在に繋がる課題の解決方法や現在との違いについて調べた。
- 2) インタビュー調査：大学の主将や高校のコーチに部員数や状況について問い合わせた。

【結果】

①現状 庄内の高校3校の内、選手はA高校で男子7名のみ、B高校で男子5名女子1名、C高校男子15名女子4名で活動している。活動頻度は全ての高校で水曜と日曜以外の週5回の練習を行っている。活動場所は庄内の京田川で行い、艇は平成元年に設立された京田川の近くにある共用艇庫に全ておかれている。艇に関しては現在主流となっているカーボンの用いられている艇はA高校が6艇、B高校が4艇、C高校が11艇、県が2艇の計23艇を所有している。このほかに現在使用出来ないものを含めた木造艇が30艇以上ある。村山のD大学では男子部員5名のみ、活動頻度は不定期。活動場所は置賜にある水窪ダムとなっている。庄内では年に1回、10月に地域の子どもから大人までを対象とした「ボート・カヌー教室」が行われている。

②過去 1979年に東北各県や日本ボート協会の協力を得て、山形県漕艇協会が設立され、1992年の「山形べにばな国体」に向けて山形県ボート協会の本拠地である庄内で県立高校4校へボート部（ボート同好会）の設置要請が行われた。また国体に向けては1985年から「第47回国民体育大会山形県競技力向上年次計画」に則り、「組織の整備拡充」・「指導体制の確立」・「選手の育成強化」・「諸条件の整備」が行われていた。特に「選手の育成強化」では小学生向けのスポーツ教室、スポーツ少年団での選手育成から成年の優秀選手の確保・強化まで広く行われていた。国体後には庄内で入部希望者が一時的に100名を超えたとの記載もあった。

【考察】 国体がきっかけとなり、一時的に入部希望者が100名を超えたのは当時の地域、小学生や中学生を対象とした選手確保にむけた取り組みがあったからだと考えられ、その後ボート部員が減少したのは選手確保や認知度アップに向けた取り組みが国体後も十分に行われなかったからであると考えられる。現在と同じように、今後の現状維持を行っていくためには現在活動している選手だけでなく、小学生や大人などへの普及が重要になってくると考えられた。

ベガルタ仙台の今後のホーム戦観客動員について

～2024年まで観客動員の推移と2024年各試合の観客動員の特徴から～

○青木 郁実（宮城教育大学）

佐藤 駿介、鈴木 紀伊、石森 永遠、佐々木 優海、佐藤 唯人、池田 晃一（宮城教育大学）

キーワード：Jリーグ、ベガルタ仙台、観客動員

【目的】 本研究では、地元である宮城県をホームタウンとするベガルタ仙台に着目し、Jリーグに参戦した1999年から2024年までの観客動員の推移と、2024年の各試合の観客動員の特徴から今後のホーム戦観客動員について考察することを目的とする。

【方法】 Jリーグやベガルタ仙台の公式ホームページ等の資料を基に、ベガルタ仙台がJリーグに参戦した1999年から2024年までの観客動員数の推移とベガルタ仙台が行っている活動やイベントについて調査を行った。また、株式会社ベガルタ仙台様より毎試合行っている観戦者アンケートのデータをご提供いただき、2024年ホーム戦各試合の観客動員の特徴について分析を行った。

【結果】

①1999年から2024年までのホーム戦の観客動員の推移について以下の結果が得られた。

(1)総観客動員数推移について

2010年のJ1昇格で3回総当たり戦から2回総当たり戦に試合形式が変わり、試合数が減少したことに伴って総観客動員数も減少している。また、2020年に新型コロナウイルスの流行に伴う入場制限などの影響で2019年の25万人から7万人まで減少したが、2021年以降コロナ禍前までの値に回復傾向にある。

(2)平均観客動員数推移について

1999年から2024年までを通しての平均観客動員数はJ1在籍時が14,740人、J2在籍時が12,833人であった。2010年のJ1昇格時には前年から平均観客動員数が約5000人増加の17332人で、その後の平均観客動員数も15,000人前後でJ2在籍時と比べて多く、安定していた。

②2024年のホーム戦各試合の観客動員の特徴について以下の結果が得られた。

ホーム戦19試合のうち、J1在籍時の平均観客動員数を上回った試合は6試合で、ダービー戦、学校の長期休み、最終戦にかけての試合、サンプリング^{註1)}の無料配布やイベント^{註2)}が開催された試合だった。反対に、J2在籍時の平均観客動員数を下回った試合は8試合で、春先の平日ナイターの試合や天候の悪い試合、下位クラブとの試合が占めていた。

【考察】 結果①よりレベルの高いリーグに在籍した方が動員数の増加が見込めるため、チームの強化、J1昇格が動員数増加に影響を与えると考えられた。また、結果②より試合によって観戦者の増減が大きく、試合日や対戦相手、イベント開催が動員数に影響を与えると考えられた。そのため、有名選手が在籍するクラブや上位クラブとの試合、学校の長期休み期間に行われる試合など自然と動員数が見込める試合以外で、季節限定や幅広い年代に注目されるイベントを行うことで過去のJ1在籍時のような、安定して高い数値の観客動員を確保できると考えられる。

註1)オリジナルグッズ(下敷きやレジャーシート)や協賛企業提供の食べ物(宮城米)など

註2)ベガルタ仙台マスコットキャラの誕生日やポケモンとコラボしたイベントなど

山形県鶴岡市における遠泳のはじまり

～荘内中学校水泳部の活動から～

○沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード：遠泳、荘内中学校、水泳部

【目的】山形県鶴岡市では、いくつかの小学校で学校行事として海での遠泳が行われており、その中で一番古い歴史を持つ鶴岡市立渡前小学校では大正10年から続いている。しかし、鶴岡で最も古い遠泳の歴史を持つのは荘内中学校（後の鶴岡南高校、現致道館高校）で、大正3年から記録が残っている。そこで本研究ではその記録から、鶴岡における遠泳のはじまりについて当時の様子を明らかにすることを目的とする。

【方法】荘内中学校の生徒と教師による「荘内中學會」が発行していた『荘内中學會報』、並びに『山形県立鶴岡南高等学校八十年史』を調査対象とし、その中に掲載されている水泳部の記述から当時の遠泳の様子を明らかにする。

【結果】『荘内中學會報第十九号』（大正4年3月発行）に「水泳部日記」として初めて水泳部の部報が掲載され、その中に遠泳の記述が登場した。その後、『大札奉祝記念号』（大正5年1月発行）、『第二十三号』（大正6年7月発行）に遠泳の記述が見られた。次に水泳部報が掲載されたのは『第二十五号』（大正9年7月発行）だが、これには遠泳の記述はなかった。その後『第三十四号』（昭和4年2月発行）の水泳部報に僅かに遠泳の記述が見られたが、その後の水泳部報には遠泳の記述はなくなり、競泳大会の結果の掲載が増えた。

初めて遠泳の記述は次の様な内容であった。卒業生の阿部耕治郎が東京帝国大学農学部と同級生で水府流太田派の師範でもあった内田千尋を招聘して、7月29日から8月9日までの12日間、鼠ヶ関で第1回水泳講習会が開催された。百余名の参加者に対して連日水府流太田派の泳法が指導され、泳力の向上によって二級から五級が与えられた。また、8月1日には相撲大会、8日には水上大運動会などのレクレーシヨンの催しも行われた。

遠泳は5日の午後、曇天で時々西風の吹くやや寒い気候の中で行われた。53名の生徒達が救助艇が4・5艘が見守る中、午後2時50分に鼠ヶ関の海岸を出発した。湾内で二十町（約2.2km）の距離を55分間泳ぎ、午後3時55分に海岸に到着した。39名が完泳し、師範からもはじめてとしては好成績だと褒められた。これが鶴岡における最初の遠泳の様子だと思われる。

【参考文献】荘内中学校水泳部（1915）「水泳部日記」『荘内中學會報』 荘内中學會, pp139-145.
大瀬欽哉（1970）「水泳部」『山形県立鶴岡南高等学校八十年史』 山形県立鶴岡南高等学校創立八十年周年記念事業期成同盟会, pp158-162.

会場 236

一般発表

(10 : 00—11 : 30)

セッション1

座長 川端 良介先生

セッション2

座長 池田 晃一先生

バスケットボールにおける東北1部リーグとM大学の オフェンス戦術のデータ比較

○石森永遠、青木郁実、鈴木紀伊、佐藤駿介、佐々木優海、佐藤唯人、池田晃一
(宮城教育大学)

キーワード：バスケットボール、シュート%、シュートエリア、ショットコンテスト

【目的】バスケットボールは約100回の攻撃回数で多くの得点を取れるかが勝利への要因となるため、オフェンスに関してのスカウティングは勝利へつながると考え、今回は自身の競技経験も踏まえ東北1部リーグとM大学を対象として各オフェンス戦術のデータ比較することとした。

【方法】

1) 分析対象

2022～2024年度における東北1部リーグとM大学の公式戦

2) 分析項目

・ショット・アシストに関するエリア (図1)

・ショットコンテスト (以下 SC)

(シュート時のDFとの身体的距離)

O (ワンアーム) OA (ワンアームアウェイ) H (ハーフアーム)

C (コンタクト) N (ノーマーク)

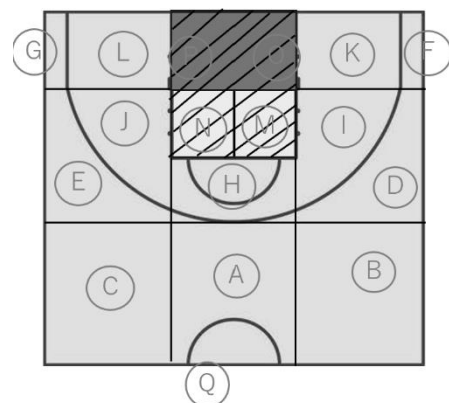


図1 エリア区分

【結果】各ショットエリアでのシュート%について、東北1部ではO.P (ゴール下、塗りつぶし部) →55.2%、O.P.N.M (制限区域、斜線部) →54.9%、H.I.J.K.L (Peri) →28.6%となりM大学ではそれぞれ57.1%、55.8%、25%となった。各SCについて、東北1部ではN→55.2%、OA→34.4%、O→23.3%、H→40%、C→37.5%となりM大学ではそれぞれ87.5%、0%、30%、41.2%、66.7%という結果になった。

【考察】

1) エリアと成功率に関して、両データともにエリアでは制限区域内特にO.Pの位置でのシュート成功率が高い数値を示したことからゴール付近エリアに入ることによって近い距離でシュートを打つことやシュートファウルを得ることができるため得点につながりやすくなると思われる。

2) SCと成功率に関して、SCは両データNが他の項目より15%も高い数値と最も大きな数値を示しており、セット戦術の利用やアシストを用いてNでのシュートを作り出すことが得点を取ることに繋がると考える。

3) SCとエリアに関して、SCのH.Cの数値が2.3番目に高くなっており、このシュート成功の内約85%はO.Pでのシュートとなっており、O.Pでの身体接触などにより体勢を崩された状態でもシュートを決めきる技術が必要と考える。

大学男子バレーボール競技における強打と軟打の研究

～アタックの決定位置に着目して～

○佐藤 唯人、青木 郁実、佐藤 駿介、鈴木 紀伊、石森 永遠、佐々木 優海、池田 晃一
(宮城教育大学)

キーワード：強打 軟打 アタック決定位置

【目的】 高根 (2020) によれば、アタックによる得点の割合は全得点の 60% を占めていることを報告しており、アタックによる得点が勝利には必要であると考えられる。そこでアタックである強打と攻撃のバリエーションを増やすことができる軟打に着目し、どのように得点しているのか、またはどこで決定しているのかを明らかにすることで、アタックに関する知見を得ることを目的とした。

【方法】 分析対象は 2024/4/20～5/26 に行われた、第 63 回東北バレーボール大学男女春季リーグ戦より男子 2 部南 6 チーム、計 21 試合 72 セットとした。本研究の対象の平均身長は 175.9 cm であった。分析項目は行われたアタックの種類とそれらアタックがコートの中のどの位置で落ちて得点したのかをコートを 3×3m の 9 つのエリアに分け (図 1)、私案の Excel 用紙に記録した。



図 1. エリア区分

【結果】

1) 全 21 試合の総得点は 3126 点であった。強打得点が 1236 点 (39%) で最も多い。次いで強打ミス 430 点 (14%)、軟打得点 398 点 (13%)、サーブミス 293 点 (9%)、反則 270 点 (9%)、サーブミス 157 点 (5%)、その他アタックポイント 153 点 (5%)、ブロックポイント 139 点 (4%)、軟打ミス 50 点 (2%) であった。

2) 強打決定エリアではブロックアウト (24%)、ML (17%)、MC (12%)、BC (11%)、MR (9%)、BR (7%)、BL (6%)、AL (4%)、AR (2%)、AC (2%)、の順で多い結果であった。軟打決定エリアでは、AL (16%)、AR (15%)、MC (15%)、MR (14%)、AC (13%)、ブロックアウト (9%)、ML (5%)、BR (5%)、BC (2%)、BL (1%)、の順で多い結果であった。

【考察】

1) 強打得点割合に関して、本研究では 39% であったが、同様に分析した明石 (1999) の研究では強打得点割合は 57% であった。この差が生まれた原因として、平均身長が明石 (1999) の研究の 187.8 cm と比較して 10 cm 以上下回っており、打点が低くなることでボールの通過点が低くなってしまったことが推察される。このことから、ネットから離れたトスを強打で攻撃する時やブロックのいないインナーコースに攻撃する際に、ボールがネットを通過する前にネットに引っかかってしまったことが強打ミスに繋がってしまったことが考えられる。

2) 強打得点では M と B エリアで多い結果となったが、軟打得点では A と M エリアで多くなった。この結果は、守備側が得点割合の多い強打を警戒し、ML や BC エリアにレシーブ位置を取ることによって空いた AL や AR などのコートのネット付近のエリアと、ブロックに塞がれているレシーバーが位置取りをしない MC エリアを軟打で狙うことで、得点したためだと考えられる。

英プレミアリーグにおけるスローインの分析-開始地点に着目して-

○鈴木 紀伊 (宮城教育大学)

青木 郁実、佐藤 駿介、石森 永遠、佐々木 優海、佐藤 唯人、池田 晃一

(宮城教育大学)

キーワード:サッカー、スローイン、プレミアリーグ

【目的】 サッカーにおけるゲームの再開方法は、キックオフやコーナーキック、スローインなどが挙げられる。その中でもスローインは1試合の中で約44回発生し¹⁾、最も多く発生する再開方法とされている。スローインは両サイドのタッチライン105mの範囲で行われ、獲得できる位置はチームによってばらつきが出る。今回の研究では、スローインの開始地点に着目し、スローインの投げられる方向によって成功・失敗に差が出るのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】 (1) 分析対象

U-NEXTで配信されている24/25イングランドプレミアリーグ第10節終了時点の上位3チームの第1節~第3節で行われたスローイン150回のうち映像を確認することができた135回を分析対象とし、一時停止しながら試合映像を分析した。

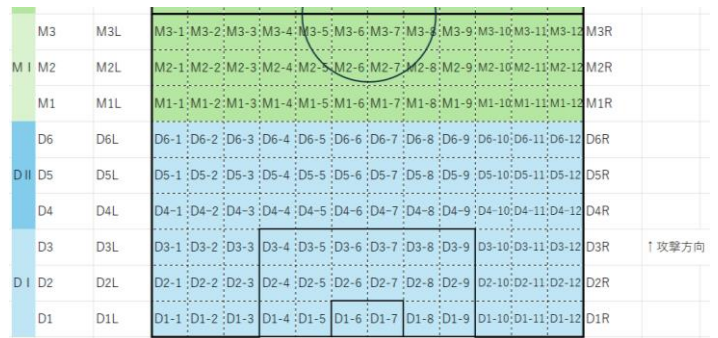


図1 サッカーコートのエリア区分の一部

(2) 分析項目

- ・ サッカーコートのエリア区分 (図1)
- ・ スローインの開始場所 : 芝生の分け目を参考に18エリアに分け、左右で36エリアとした。
- ・ スローインの成功/失敗 : スローインをしたチームの選手が最初にボールに触れたとき、成功。
- ・ スローインを受けた場所 : 芝生の分け目を参考に216エリアに分けた。

【結果】 スローインは前方向に70回投げられ (A:20、M:31、D:19)、43回成功し、27回 (A:5、M:13、D:9) 失敗した。後方に46回 (A:20、M:20、D:6) 投げられ、46回成功した。横方向に19回 (A:10、M:7、D:2) 投げられ、17回成功し、2回 (A:2) 失敗した。前方向のスローインはDI、DII、MIで多く発生した。そして、失敗の数もそれぞれ2/5本、7/14本、7/16本となった。後方へのスローインはMII、AIで多く発生し、すべて成功した。

【考察】 DI、DII、MIでの前方向のスローインは自陣のゴールから遠ざけたく、長いスローインを前方にいる味方にめがけて投げるが、時間がかかることから守備に対応され、失敗につながったと考えられる。MII、AIでの後方へのスローインは、相手はゴールを守ることを優先するため、後方で味方がフリーになる。そこに投げることで成功につながったと考えられる。

【参考文献】 1) McKinley E. Game of throw-ins. American soccer analysis,

<https://www.americansocceranalysis.com/home/2018/11/27/game-of-throw-ins> (2024/11/27 閲覧)

少年期の野球選手の入団および卒団時の意識（第2報）

経年のアンケート調査結果の比較

○大室 康平（八戸工業大学 基礎教育研究センター）

鵜瀬 亮一（新潟医療福祉大学 健康科学部）

キーワード： 野球 少年野球選手 入団理由 面白さ 悩み

【目的】近年、小学生から高校生のスポーツに取り組む環境は、少子化や中学校部活動の地域移行など大きく変化をしている。特に日本で多くの競技人口があった「野球」は部員数の減少が顕著であり、10代の野球人口は2001年には282万人だったのに対し、2023年には174万人と約100万人減少していると報告されている（笹川スポーツ財団，2023）。今後も少子化の流れを考えると、野球の競技人口が減少することは避けられないが、野球に取り組む選手の意識を理解し、より良い環境を作っていくことは、野球人口の減少を抑制することに貢献する可能性が考えられる。本研究は選手へのアンケート結果から、野球界に対する示唆を得ることを目的とした。

【方法】アンケート対象者は、令和4（2022）年度X県の小学生から高校生の野球チームに所属する児童・生徒であった。回答者は入団アンケート計1792名（小学生217名、中学生865名、高校生710名）、卒団アンケート計1967名（小学生148名、中学生1190名、高校生629名）であった。入団アンケートは20問、卒団アンケートは13問あり、入団の動機や野球を続ける時期、野球やって良かったことや悩みなどについての質問から構成されている。それぞれの質問項目に対し単純集計を行い、割合を算出し比較を行った。

【結果と考察】<入団の理由（入団アンケート）>初めてチームに入った入団者の入団理由は、「野球が好きだから・楽しいから」が最も多く22.0%、次いで「友達がやっているから・誘われたから」と17.8%、「他のスポーツに比べて面白そうだから」が12.2%の順に多かった。野球の競技の面白さと同時に、友達が存在が重要であることが明らかになった。

<良かったこと・悩んだこと（卒団アンケート）>野球をやって良かったことは、「良い友達ができただけ」が最も多く20.7%、次いで「努力することの大切さを知った」が13.1%であり、入団の理由と同様に、友達が存在が大きいことが明らかになった。また野球をやるなかで特に悩んだことは、「勉強との両立」が最も多く、17.0%であり、次いで「上手くならない、レギュラーになれない」が15.4%、近い割合で「ケガ」が14.9%であった。「勉強との両立」は中学生、高校生の割合が、小学生に比べて高くなっていた。

【参考資料】笹川スポーツ財団ウェブサイト https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/data/baseball_teens.html（2024年11月閲覧）

日本高等学校野球連盟ウェブサイト <https://www.jhbf.or.jp/data/statistical/koushiki/2024.html>（2024年11月閲覧）

【付記】本研究は、大室と鵜瀬（東北体育スポーツ学研究，2024）の続報のため第2報とした。

体幹捻転動作に関する練習方法について

—やり投げ選手を対象とした事例的研究—

○佐々木 優海

青木 郁実、鈴木 紀伊、佐藤 駿介、石森 永遠、佐藤 唯人、池田 晃一（宮城教育大学）

キーワード：体幹捻転動作, 捻転角度, 肩角度, 腰角度

【目的】 本研究では、初速度を生み出す方法の1つである体幹捻転動作に着目し、やり投げ選手に対してハンマー投げのスイングという体幹捻転動作を含む技術を基に練習を行い、練習前後で飛距離や動作にどのような影響を与えたかを明らかにし、練習の効果や投擲指導における知見を得ることを目的とした。

【方法】 大学の陸上競技部に所属し、やり投げを専門とする男子学生(被験者 A)1名と女子学生(被験者 B)1名を対象とした。練習内容は、ハンマー歩行に加え、それぞれの課題に沿った練習を実施した。期間は、9月3日から10月12日までの6週間とし、週3回、合計15回の練習を行った。練習前後に行った撮影では、被験者の身体23か所、やり先端、重心の2か所にマークを付け、デジタルハイスピードカメラ(NAC社製, HX-1)2台を用いてフィルムスピード250f/sec、シャッタースピード2Kで撮影し、三次元分析を行った。分析項目は、肩角度(水平面内における左右肩峰を結んだ線分とX軸のなす角)、腰角度(水平面内における左右大転子をむずんだ線分とX軸のなす角)、その差である捻転角度をはじめ、リリースパラメーター(初速度、リリース角度、姿勢角、迎え角)、基礎的パラメーター(助走速度、局面時間、加速距離)、やり及び身体各部位速度(右肘、右肩、右大転子、左大転子)とした。

【結果】 ハンマー歩行の練習を行った結果、練習前の測定データと比較すると練習後では、被験者 A は捻転角度が増加していたものの、記録の向上は見られず(-6.57m)、初速度は減少(-1.41m/s)していた。反対に被験者 B は捻転角度が減少していたものの、記録の向上(+1.48m)が見られたが、初速度は減少(-0.36m/s)していた。肩、腰の角度はどちらの被験者も増加した。

【考察】 ハンマー歩行練習は捻転力を増大させる運動が行われている。吉本ら(2022)の研究においては、バッティングスピードが向上した結果がでており、本研究においても被験者 A、Bともに肩の速度の最大値が増加していることから、捻転角度の増減は被験者それぞれで違うものの、上肢の速度を高めるという点では影響を及ぼした可能性があると考えられる。また、村上(2017)の研究においてやりの初速度が高いほど、記録が大きくなるという正の相関が見られており、本研究で被験者 A の記録が向上しなかったのは、初速度の減少が影響を与えていると考えられる。被験者 B においては、初速度の水平成分が減少したが鉛直成分が増加しており、やりのリリース角(やり重心の軌跡)と姿勢角(やり重心と先端を結んだ線)の関係による揚力の影響により、記録が増加するという結果につながった可能性があると考えられる。

【参考文献】 吉本ら(2022)ハンマー歩行トレーニングが野球のバッティングにおけるスイング速度に与える影響 スポーツパフォーマンス研究,14,39-44,2022

三次元分析による 50m 走の短距離走経験者と陸上競技未経験者の疾走動作の違い

○八巻朱麗(宮城教育大学)、赤間丞、宮本杏里、池田晃一(宮城教育大学)

キーワード: 疾走動作

【目的】 本研究は、短距離走経験者と陸上競技未経験者の疾走動作を比較し分析することで、その違いから改善点を見つけ、疾走速度を高めるための動作を検討することを目的としている。

【方法】

1) 分析対象

- ・短距離走経験者の学生 1 名(男、20 歳、身長 176cm、体重 70 kg、競技歴 2 年)
- ・陸上競技未経験者の学生 1 名(男、21 歳、身長 171cm、体重 65kg、バスケットボール 9 年)

2) 分析方法

デジタルハイスピードカメラ (NAC 社製、HX-1) 2 台を用いてフィルムスピード 250f/sec シャッタースピード 2K で 2 名の 50m 走の 25m~31m 地点で撮影を実施した。その後、撮影した映像をパソコンに取り込んでファイル形式にし、経験者と未経験者の疾走動作を分析した。

3) 分析項目

- ・身体重心位置(支持脚のつま先が接地した時)
- ・股関節、膝の角度 (支持脚の足全体が接地している時)
- ・遊脚の股関節の角速度(スイング時)

【結果】

- ① ピッチについて、経験者→4.46 歩/s、未経験者→4.31 歩/s
- ② 身長に対するストライド比について、経験者→114%(2.01m)、未経験者→80%(1.39m)
- ③ 支持脚接地時、重心に対して拇指球の位置経験者→-0.11m、未経験者→-0.17m
- ④ 支持脚の接地時における遊脚膝関節角度について、経験者→34.32°、未経験者→35.05°
- ⑤ 遊脚の股関節屈曲最大角速度について、経験者→17.54°/秒、未経験者→11.85°/秒
- ⑥ 遊脚股関節角度の最小値について、経験者→75.29°、未経験者→100.13°
- ⑦ 遊脚最大股関節屈曲後の股関節伸展角速度、経験者→17.54°/s、未経験者→12.97°/s

【考察】 ピッチとストライドの積が疾走速度になるため、両者とも高いことが望ましい。また、身長に対するストライド比が経験者は 100%を超えているが、未経験者は 100%を超えていない。そのため、未経験者はストライドを伸ばすべきであると考えられる。支持脚について、支持局面では、ブレーキをできるだけかけないために支持脚の接地は重心の真下に着くことが望ましい。これに関して両被験者とも重心に対しての拇指球の位置の差に大差がみられなかったが、身長差を考慮すると、経験者はブレーキを最小限に抑えられているが、未経験者はブレーキがかかりやすくなっていると考えられる。遊脚について、遊脚の膝関節角度を小さくすることで慣性モーメントが小さくなることで、遊脚の股関節屈曲角速度が速くなり、遊脚全体のスイング速度が上がる。また、遊脚が接地するまでの股関節伸展角度は経験者のほうが速かった。そのため、遊脚の最大股関節屈曲後の股関節伸展角速度が速いほど、地面からの大きな反力を受けることができると考えられる。

それらを考慮すると、経験者はスイング時に遊脚の膝関節を曲げることで、スイング速度が上がり、疾走速度を高められると考えられる。未経験者はスイング時に遊脚の膝関節を曲げ、膝を上げつつ、振り下ろしの速度を速めることで疾走速度を高めることにつながると考えられる。

自転車運動がその後のリバウンドジャンプ動作に与える影響

○近藤 玖伸（福島大学大学院），本嶋 良恵（福島大学）

キーワード：トライアスロン，SSC 機能，動作分析，下肢関節トルク

【目的】

トライアスロン競技では、水泳、自転車、ランニングの3種目が連続して行われる。自転車運動後のパフォーマンスへの影響について、ランニング動作では股関節最大伸展角度が減少し、最大屈曲角度が増加すること (Nicole et al., 2013)、ホッピング動作では SSC 機能が低下することが報告されている (高橋ほか, 2020)。そこで本研究では、自転車運動後の SSC 機能低下に着目し、下肢関節トルクへの影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

実験対象者は、運動習慣のある男子大学生7名とした。対象者には、15分間の自転車運動およびその前後に5跳躍の連続ホッピングを実施してもらい、ホッピング動作をデジタルカメラ240 fps とフォースプレート1000 Hz で計測した。分析項目は、SSC 機能の評価指標であるRSI、接地時間、跳躍高、下肢3関節の角度、角速度、トルクとした。各分析項目の自転車運動前後（以下、「Pre」「Post」と略す）の比較を行うために、対応のあるt検定を行うとともに、差の大きさを評価するために効果量dを求めた。

【結果および考察】

SSC 機能の評価指標であるRSIでは、PrePost測定間に有意差は認められなかったもの ($p = 0.10$)、効果量は大 ($d = 0.92$) であり、Post測定で低下する傾向が見られた。接地時間はPrePost測定間で有意な変化は認められなかったが、跳躍高はPost測定で有意に低下した ($p = 0.02$, $d = 0.94$)。下肢関節最大伸展トルクにおいて、足関節、股関節ではPrePost測定間で有意差は認められなかった

が、膝関節ではPost測定で有意に低下した ($p = 0.01$, $d = 1.26$)。このことから、跳躍高の低下には膝関節伸展トルクの低下が影響していると推察される。

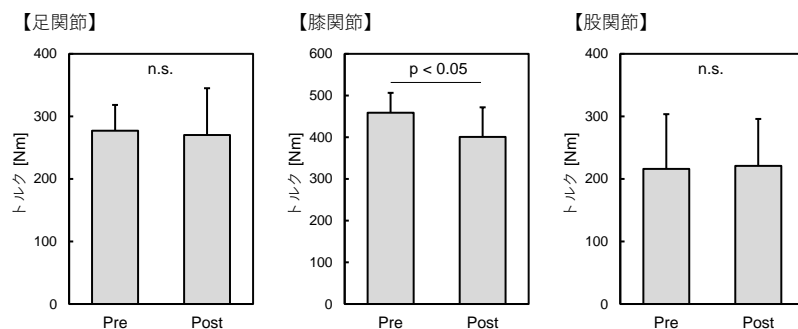


図1. 下肢関節最大伸展トルク

【結論】

自転車運動後の連続ホッピングにおいて、跳躍高が低下すること、下肢3関節の中で膝関節伸展トルクのみが有意に低下することが明らかになった。

会場 230

特別講演

部活動の地域移行の歴史、現状、課題

(共催：全国大学体育連合 東北支部)

(12：45－14：15)

関西大学

人間健康学部・人間健康研究科

神谷 拓先生

司会 高間 章先生

(聖和学園短期大学)